

「道」としての川と「コタン (集落)」

環境

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、今そして未来へ

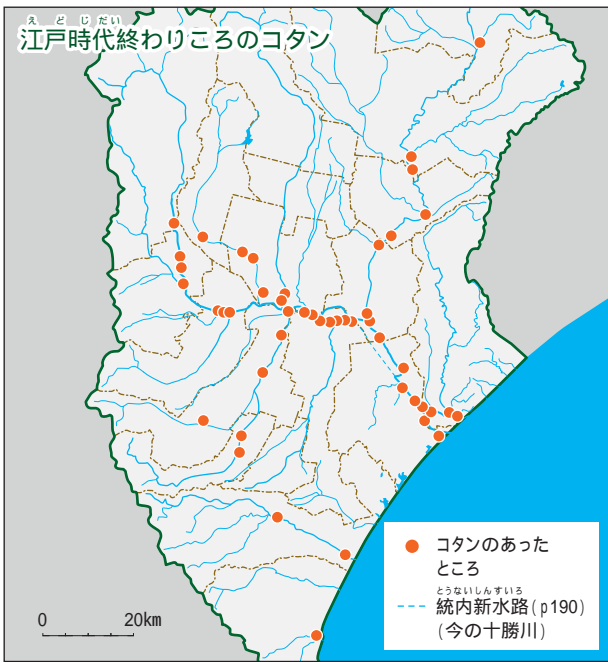
用語

さくいん



分かれ、つながりあう、明治29年(1896)ころの十勝川と支流。1858年の記録(1)を見ると、そのころの「十勝川」は南の流れ(赤矢印)だったらしい。(国土地理院所蔵の明治29年発行の1/5万地形図「止若」を使用。50%に縮小)

伝統的なアイヌ文化では、川(ペツ、ナイ)は大切な「道」でした。これは、ずっと昔から同じで、開拓が始まったあとでもしばらくは変わりません(p175)。
川は山から海までつながっています。川は何本もの細かい川(支流)が集まってできているため、川をたどれば、いろいろな場所とのつながりができます。
また、水が流れているので、草木があまりありません。通行のジャマになるものが少なく、見わたしもききます。
川と関係なく陸を移動すると、丘の登り降りがありますが、中流~下流部の川(や川ぞい)にはなだらかな下り、またはなだらかな上りしかありません。
さらに、水には浮力(物を浮かべる力)があるので、舟を使うと、かつぐよりたくさんの荷物を運ぶことができます。川は交通路として、とてもすぐれているのです。



川とコタン (集落)

川は、食べ物をとる場所であり、道でもあります。そのため、内陸のコタン(集落)は川の近くにつくられました(海ぞいのコタンもあります)。大きな川から少し入った支流ぞいに、また、ちょっとした洪水でも水をかぶるところ(河原)ではなく、少し小高い場所につくられることが多かったようです。
1858年(江戸時代終わり近く)におこなわれた松浦武四郎(p142)の調査によると、十勝には78のコタンに、284戸の家があり、1,336人(以上)の人々が暮らしていたといえます(一部1856年のデータ)(『十勝川の川舟文化史 湊標』より)。

(左)1858(1855)年、十勝にあったコタン(地点は推定・一部略)。(参考:『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌 下・下』、『帯広市社会教育叢書1 愛郷誌料』)

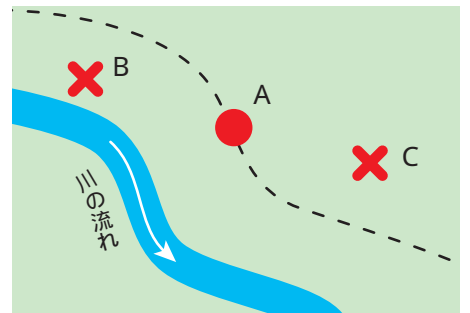
方向は川の流が基本

アイヌ文化では、川を基本として住むところを決め、移動する時にはおもに川や川ぞいを使います。位置関係についても、東西南北ではなく、川上と川下のたて方向、川側と山側の横方向によって表していました。

また、重要な場所にはそのようすを表した名前をつけ、これらを合わせて、広い範囲の地理をつかんでいました。ですからアイヌ語の地名や河川名には、地形や自然のようすが表されることがよくあります。

例えば美生川(芽室町)の「美生」は、もとは「ピパイロ」に当てた字で、「カワシンジユ貝(ピパ)が多い」という意味です。

さらに、川上はカムイ(神)のいる方向とされました(家 p130)。



Aから見て、Bは「川上の川側」で、Cは「川下の山側」。

1 1858年の記録(きらく): 松浦武四郎(p142)『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』
2 カワシンジユ貝(カワシンジユがい): カワシンジユ貝(ピパ)は穂(ほ)をつむ道具として使われ、その産地には「ピパ」が名づけられることが多い。十勝や全道の地名・

河川名で多く見られる。美馬牛(ピバウシ=ピバウシ)、美唄(ピバイ=ピバオイ)など。
3 「ナイ」: 清水町のベケレベツ川支流には、その名も「ナイ川」(市街地から日勝峠に向かう)がある。

「内」や「別」は、「川」のこと ... アイヌ語による十勝の地名・川の名前

市町村名とアイヌ語

十勝の地名の多くは、アイヌ語の地名や川の名前からきています。「別」や「内」などの「べつ」「ない」は、ほとんどがアイヌ語の「ペツ」「ナイ」であって、どちらも「川」の意味です。

市町村名	名に関係する河川	アイヌ語の地名・河川名	意味
足寄	足寄川	エシヨロペツ	沿って下る川。
池田	—	(アイヌ語由来ではない)	明治29年(1896)にできた、池田農場から
浦幌	浦幌川	オラッオロ、ウラルポロほか	オラッオロ=ヤマシャクヤクのところ、ウラルポロ=霧が多い、ウライポロ=ウライ(魚をとるしかけ)が多い、など
音更	音更川	オトツケ	かみの毛のところ?
帯広	帯広川	オペレペレケツ	河口がたくさん分かれている川
上士幌	士幌川(の上流)	シュホロペツ(スポロ)	シュホロペツ=ナベを水につけた川。スポロ=川水のうず巻いているところ
更別	サラベツ川	サルペツ	ヨシ原の川。「猿別」と同じ。サラベツ川は猿別川の支流
鹿追	クテクウシ川	クテクウシ	シカとり柵のあるところ。「鹿追」はこの意味から
士幌	士幌川	シュホロペツ(スポロ)	シュホロペツ=ナベを水につけた川。スポロ=川水のうず巻いているところ
清水	ペケレベツ川	(ペ)ペケルペツ	[ペ]ペケルペツ=[水が]きれいな川。「清水」はこの意味から
新得	パンケ新得川	シットク	ひじ(川が曲がったところ)や山が飛び出たところのこと)
大樹	-	タイキウシ	ノミがいるところ
忠類(幕別町)	(今のセオトープイ川・朝日川か?)	チウルイトープイ	流れの激しいトープイ(当縁川)
豊頃	-	トッヨカオロ	意味不明
中札内	札内川(の中流)	サツナイ	かわく川
広尾	広尾川	ピロロ、ピオロ、ピルイペツほか	ピロロ=陰のところ、ピオロ=石のところ、ピルイペツ=「と石(5)」の川、ピラオロ=ガケのところ
本別	本別川	ボンペツ	小さい川
幕別	(幕別川)	マクンペツ	後ろにある川
芽室	芽室川	メモロペツ	わき水のあるところの川
陸別	陸別川	リクンペツ	高いところにある川

いくつかの河川名とアイヌ語

今の河川名	アイヌ語河川名	意味
十勝川	トカッチまたはトゥカッチ	よくわかっていない。トカッチ=オッパイが焼ける、トゥカッチ=ゆうれい、などの説がある
利別川	トウシペツ	縄川。十勝アイヌと釧路アイヌの境目だから。縄はへびのことで、へびがいた川だから、へびのように曲がりくねった川だから、などの説がある
歴舟川	ペルプネイ	水が大きい者〔川〕。西南風がふくと増水するかららしい。はじめは、「歴舟」と書いて、ペルプネ、ペルフネと読んでいた。

4 ヨシ(葦、蘆):イネ科の草。水辺に多い。もとは「アシ」といういたが、「悪し(あし)」につながるという、ヨシ(「よし」につながる)と呼ばれるようになってきた。
5 と石(磁石・といし):石材をみがいて美しくしたり、刃物をすって切れ味をよくし

たりするため(研ぐ〔とぐ〕ため)の石。
6 幕別川(まくべつがわ):昭和21年(1946)発行の地形図では、今の猿別川(さるべつがわ)の最下流部(猿別市街から十勝川合流まで)が「幕別川」となっている。